

究極の住民自治！住民による住民のための住民サービス

ーフロリダ州セント・ルシーカウンティに学ぶ その 3ー

ニューヨーク事務所

1 行政運営の主体たる住民の役割

米国の地方自治体（市町村）は、住民が住民投票により自治体をつくることを決議して初めて創設される。自治体の運営方法、規則なども、州憲法または州法のもと、住民の意思によって決定される。米国の地方自治体が「州の創造物（Creatures of the State）」といわれる所以である。こうした歴史的背景から、概して米国人の自治体運営への関心は高く、住民投票や各種委員会での意見表明、あるいは非営利団体への参画やボランティアとして公共サービスの提供を担うなど、多くの住民が様々な場面で積極的に行政運営に携わっている。

2 セント・ルシーにおける住民参加

クリアレポート No.376 で取り上げた、フロリダ州セント・ルシーカウンティにおいても、住民は、パートナー団体・組織のメンバーやボランティアとして、あるいは予算編成過程での市民予算委員会や公聴会での意見具申など、広範にわたって行政運営へ参画しており、それは、カウンティが財政的な課題を解決する上でも重要な役割を果たしている。

カウンティは地元のボランティア団体や関係機関、企業等とのパートナーシップの構築により、図書館や歴史センター、低所得者層向けの診療所など、多くの公共サービスにおいて、効果的な資金調達と運営方法の転換を実現し、予算の削減とサービス維持の両立に成功している。また、様々な経歴を持つ住民で構成される市民予算委員会は、カウンティが財政再建策を実行する際の住民の合意形成に大きく貢献している。特に歴史センターの例では、住民側の要望によりカウンティが一旦下した閉鎖の決定を翻し、現在はボランティアによって運営され、訪問者は以前より 20%増えているという。

3 住民の決断と行動

セント・ルシーカウンティ地域歴史センターは、セント・ルシーの歴史や開拓当時の生活様式を紹介する博物館である。1952 年に設立されたセント・ルシー歴史協会のメンバーが、地域住民から当時の写真や遺品などを集め、小さな仮設部屋での展示から始めたもので、1968 年に現在の場所へカウンティの歴史センターが開設された。しかし、リーマン・ショック以降の財政状況の悪化に伴い、カウンティは歴史センターの閉鎖を決定する。それを知った歴史協会は、歴史センターの存続要望とともに、マンパワーの提供を申し入れる。現在、歴史センターは、カウンティの 3 人のフルタイムスタッフに替わり、40 人の協会のボランティアスタッフが交代で運営に当たっている。歴史協会の協力により施設の運営は維持され、カウンティは人件費の削減を実現し、現在はメンテナンスや光熱費などの施設管理費のみを負担している。



当時の農場の様子を写真パネルで説明する
歴史協会 Bennett 会長



パイナップル農家の生活様式の説明をする
ボランティアスタッフの Lucille さん



ボランティアスタッフのみなさん



Lucille さん（写真右）はセント・ルシーの
歴史書も執筆している（写真中央の書籍）

ボランティアスタッフの多くは高齢者であるが、現役の高校生や大学教授も含まれる。また、教員退職者も多く、彼らは地域の歴史に豊富な知識を持つ。このため、新たに始めたボランティアスタッフによるガイドツアーは利用者に好評という。さらに、教員退職者のメンバーが多いことから、学校とのコネクションも強化され、小中学校や高等学校、大学からの新たな訪問者の獲得にも成功している。協会は地域の歴史書も発行しており、それは博物館のギフトショップで販売され、収益は施設の収入源の一部となっている。

住民の地道な収集作業から始められた博物館は、カウンティの支援により大きく発展する。しかしカウンティが支援を続けられなくなったとき、それは住民の手に再び託される。ボランティアスタッフの多くは 80 歳前後の高齢者であるが、澆刺とした対応、豊富な知識はもちろん、郷土を愛する熱い思いは、来場者の心を掴む。博物館は、自らの労力を惜しみなく提供する住民の手によって、さらなる発展を遂げたのだ。

4 主役としての責任と誇り

パートナー団体の一つである、セント・ルシーカウンティ図書館協会 Pinkney 氏は、「パートナー団体が行政運営を支援したり、運営に参画することは、米国では一般的なことだ」

と言う。関係者へのインタビューで分かったことは、カウンティはこれまでもパートナー団体等と連携し、多くの行政サービスを提供してきたが、財政危機をきっかけに、その関わりがさらに積極的かつ能動的なものとなった、否、ならざるを得なくなったということであった。

しかし、彼らの何と生き生きと活動していることか。それは、市民予算委員会に同席した際も等しく感じたことであった。彼らは、カウンティ政府とともに働くことに誇りを持ち、喜びを見出している。それは、自らの提案が施策に現実として反映するからである。コミュニティの代表、あるいはパートナー団体のメンバーとして、さらに言えば、カウンティ政府の一員として、責任ある立場にあるからといえよう。だからこそ、彼らは真剣に課題に取り組み、議論し、そして実行する。責任と達成感によって、人は自ら行動し、そこに価値を見出すのではないだろうか。

国家ではなく住民自らが地方自治体を創設し、自分たちで統治と治安を実行してきた歴史を持つ米国と我が国では、前提条件が大きく異なる。しかし、自ら公共利益のために行動できる住民、地域社会を醸成していくことは、これからの行政運営に必要なことと考える。義務ではなく、権利として住民が自らの意思で、自分たちの町をより良くする主体となって行動し、自分の家族、友人、知人の笑顔と感謝というかけがえのない対価となって返ってくる好循環が生まれれば、住民の幸福度が高まり、生活はより豊かなものとなるだろう。セント・ルシーの取り組みが、地域づくりの一つのヒントとなれば幸いである。

(牧所長補佐 広島市派遣)

(参考)

クリアレポート No.376 「フロリダ州セント・ルシーカウンティ財政再建の軌跡
ーセント・ルシーから学ぶことー」

<http://www.clair.or.jp/j/forum/pub/docs/376.pdf>